

オンライン観光や特産品ギフトで 関係人口の維持・創出を

新しい旅行の形「リモートトリップ」

島根県海士町（中ノ島）は、春から観光シーズンを迎えます。しかし今年は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため来島や外出を自粛したことで、島内の宿泊・飲食業などに大きな影響が出ました。そんな中、株式会社島ファクトリーでは「リモートトリップ（以下、リモトリ）」を企画・販売しました。

当社は二〇一三年に海士町のリネン工場として開業。島前地区の観光業のリネンサプライ問題を解決すべく、宿のシーツなどの洗濯事業をはじめました。一六年からは、旅行ツアーの企画・販売なども行なっています。今年はＩＴターのスタッフも増え、観光により力を入れようとしていた矢先、観光のあり方そのものを見直す必要が出てきました。

株式会社島ファクトリー 石原紗和子
海士町人づくり特命担当課長 濱中 香理

四月、スタッフの一人が「今できること、移動せずに観光する方法はないか」と、会議中に疑問を投げかけたことが、リモトリ企画の発端です。リモトリは、オンラインで参加者と島をつなぎ、自宅にいなから旅ができるバーチャルツアーです。当社では、オンライン観光を提供するにあたり、どうすれば実際の旅行で味わえる感動に近い体験を提供できるのか、議論を重ねました。その結果、既存の動画サイトの映像とは異なる視点を用意すること、旅行の醍醐味である食事を取り入れること、島の魅力である個性豊かな住民に参加してもらうことなどの要素を軸に、ツアーを組みました。

リモトリではZOOM（ウェブ会議ツール）を利用するため、初心者の方には使い方を説明します。参加者の準備が済むと、地元ガイドがフェリーに乗りこみツアー開始。島内観





リモートトリップでの食事の様子。離れていてもオンラインでつながる。

の過ごし方の工夫を共有する
など、一体感が生まれました。
これまで（八月末時点）に
九回開催し、延べ一八〇人の
参加がありました。リピーター
も考慮して毎回内容や訪れる場
所を変更しています。また、五
月には親交のある宮城県仙沼
市と海士町を同時中継で結んだ
り、六月には隠岐神社周辺の観
光ガイドを行なう隠岐桜風舎と

光では中継先を三カ所用意し、観光スポットの隠岐神社で
の画面を通じた参拝、車載カメラを使った明屋海岸沿いの
ドライブ、名物宿で女将とともに体験する民謡キンニヤモ
ニヤ踊りなど、臨場感を演出しています。
また、海を見ながら海産物を一緒に調理して食べる体験
では、事前に参加者の元に海士町の名産品を贈ります。時
期ごとに特産物を変え、四〜六月は、名人にレクチャーを
受けながら旬のイワガキの殻開け体験を行いました。七
〜八月は、ヒオウギ貝などを蒸し焼きにするカンカン焼き
でバーベキュー気分を楽しむなど、ただ特産品を味わうの
ではなく、体験を組み合わせるように工夫しています。

ツアーの最後は、参加者をグループに分け、島人も参加す
る交流会を実施。海士町に関する質問を受けたり、コロナ禍

連携して歴史謎解きを開催するなど、提供する企画に幅を
持たせています。七月には日本航空とタイアップし、「世
界初バーチャルフライトで行く隠岐海士町への潮風リモ
ートトリップ」と題したツアーを実施しました。

参加者からは「臨場感を大切にしながら厳選された場所
を見ることができ、リモートだからできる旅として新鮮だ
った」との声や、「各参加者が同時に調理して食べる体験が
面白かった。体験後の座談会で、参加者同士で感想を言
合ったり、島の方々と話す時間が有意義だった」などの意
見をいただいています。また、車いすを使用されているな
ど実際の来島が難しい方からは、「この企画を通じて旅行を
味わえることが嬉しい」という感想が寄せられました。

コロナ情勢下における島内観光の代替案として企画した
ツアーですが、体験後に実際の来島を希望する方も多いこ
とから、当社としては、今後は旅行前の説明会に近い形で
の活用もできると感じています。離島は、移動費用や時間
がかかるためハードルの高い旅行先です。だからこそ、リ
モトリを通じてまず島を体験し、後日、実際に来島される
方が増えることを願っています。リモトリは、これからの
新しい旅行形式のひとつになっていくと感じています。

特産品の詰め合わせを島外へ販売

コロナにより、日本中の観光業が大きな影響を受けてい
ます。海士町もマリンポートホテル海士（以下、マリンポート）

をはじめ、島内の民宿など宿泊業が、感染拡大防止の観点から島外からのお客様の受け入れを制限すべきか、それとも経営を優先させるべきか、という悩ましい判断を迫られました。四月、マリンポートでは、政府の緊急事態宣言に對する町の対応にならない、観光客の受け入れを一定期間停止しました。

これは、島の「食」を担う生産者の方々に多大な影響をもたらしました。マリンポートでは、島内産食材を使った食事にこだわり、町内の多くの生産者の協力のもと、年間約一万人ほどの宿泊客に対し、米・野菜・海産物・隠岐牛などの島の恵みを提供しています。カキを例にとると、年間八〇〇〇個ほどをお客様へ提供しており、長年お付き合いのある生産者の方は、毎年三月のベストシーズンに大ぶりて旨味が凝縮されたイワガキを用意してくださっています。マリンポートのメニュー計画は、早ければ半年前からはじまりますが、受け入れを停止したことで、せっかくの自然の恵みが行き場を失ってしまいました。

そこで、生産者の方々と一緒に料理を開発してきたシェフ、レストランと当社のスタッフが話し合い発案したのが、「海土のてしごとマルシェ」です。

このマルシェは、マリンポートに食材を納める生産者の産品を中心に、町の特産物を一四品ほど箱に詰め、島外のお客様へお送りするものです。ホームページなどを通じて注文をいただき、生産者から穫れたての野菜、水揚げした



生産者の思いが詰まった「海土のてしごとマルシェ」。

地産地商課の後援により、マリンポートの利用者をはじめ、日本全国のお客様の目に触れる機会が増えるよう、町のホームページなどにも情報を記載していただきました。

五月に販売を開始したところ、出身者のほか、海土町に來たことのある方、知り合いが移住したという方、生産者と一緒に町の地方創生プロジェクトに取り組んだ方など、「海土町とつながりたい、応援したい」という多くの方々から注文をいただいております。

八月末時点で、約一七〇セットの注文があり、購入者からは「とてもおいしく、懐かしかった」との感想や、「一緒に頑張らしましょう」との励ましのメッセージが電話やメールで寄せられるなど、直接会うことができない現況でも、町をサポートしていただける方々との強い絆を確認できて

ばかりの貝類、さばきたての隠岐牛、産み立ての卵などを仕入れます。加えて、島を代表するお土産の「キンニヤモニヤまんじゅう」、住民にも親しみのある「ふくぎ茶」、昔ながらの家庭の味「こじょうゆみそ」、高純度な「海土の塩」、地元ファンも多い甘酸っぱい「みかんジャム」なども箱詰めします。町役場の

います。

例年であればたくさんの観光客や帰省客であふれている海士町の夏も、今年はいつになく静かに終わろうとしています。秋は実りの季節、海士町では白イカや新米などの季節となります。大手を振って「来島してください」とは、まだ言えない状況ですが、特産品を通じて多くの皆様とのつながりを強めていければと考えています。（石原紗和子）

島の味で町出身の学生を応援

海士町は、本土と比べ高齢化率が高く、医療体制も十分ではありません。政府による緊急事態宣言の期間中、帰省や県内外からの来島について、本町でも自粛要請を行ないました。その間、都会では食料品の買い占めが起こるなどの状況に、進学などで島を離れて暮らす子どもの生活を心配する親御さんの声も聞かれました。

そこで本町では、帰省（来島）したいという気持ちを抑え、自粛に協力してくれた学生を対象に、感謝と生活応援の思いを込めて島の特産品を届ける「海士町おうえん便（以下、おうえん便）」を企画しました。おうえん便は、海士の本気米、イワガキ、隠岐牛ハンバーグ、冷凍もずくなど島の特産品を詰め合わせたセットで、五月一日～三十一日までの期間、過去に町に住民票を置いていた学生を対象に申し込みを受け付けました。

その結果、約一〇〇件の申請があり、大江和彦町長直筆のメッセージ「元気で頑張らっしゃい！ また戻ったら会わっじゃ！」を添えてお届けしました。

受け取った学生たちからは、「離れていてもつながっていると実感でき、島で食べるのが待ち遠しい」「素敵な島で三年間暮らしたことが幸せだったと痛感した」といった声をいただきました。またSNS上でも、「開けた瞬間、島のおいを感じた。海士町は温かい」「もずくの食べ方をきっかけに家族の会話が生まれた」などの感謝やコメントが寄せられるなど、大変喜んでいただけただけです。

コロナによって、これまで当たり前だった島外との関係づくりが難しい世の中になりました。一方、おうえん便の取り組みは、島外の学生たちとの絆を結び直す新たなきっかけづくりになっています。このような時だからこそ、互いに応援し合う関係を強固にしていきたいものです。

（濱中香理）

石原紗和子（いしはら さわこ）

神奈川県出身。シンガポールマーケティング会社にて5年間、インバウンド観光マーケティングに携わる。2018年に帰国し、海士町へ移住。（株）島ファクトリーのメンバーとして、マリンポートホテル海士町の改修や隠岐4島の観光マーケティングなどを担当。

濱中香理（はまなか かおり）

昭和51年生まれ。平成14年海士町役場入庁。地域振興課（現在の地産地商課）で3年間、水産業務を担当。同17年からは特命担当としてCAS事業の立ち上げから商品開発、販路開拓などに携わる。同27年7月に総務課プロジェクトおよび地方創生戦略プロジェクトを担当。